



消えた街角・富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和32年 日本橋懐古(白木屋)

一六〇三年、江戸幕府を開いた徳川家康は城下町建設にあたって、商業活動の中心を日本橋に決定した。そしてまず、平川の流路を変更して日本橋川を開削し、日本橋を架けた。さらにここを起点に全国へ通じる幹線五街道と間道を整備、宿場を設け伝馬の制を定めて、旅と輸送の便を図った。

これによって日本橋は急速に発展し、古絵図で見るとな川には舟が満ち、岸には倉庫、問屋、商家が並び建つ名実ともに日本の商業中心街を形成していった。

この江戸時代三百年の繁栄が、今に引き継がれる数々の老舗を育てたわけである。アイウエオ順にあげると、和菓子のお米太楼、はんべんの神茂、刃物の木屋、漆器の黒江屋、果物の千足屋、寝具の西川、鯉節のにんべん、紙の篠原、三越百貨店、化粧品、柳屋、海苔の山形屋、同じく山本海苔店、銘茶の山本山、乾物の八木長など、さすがに日本橋の感を強くする。この中に、創業一六六一年の白木屋小問物店のちの白木屋百貨店も含まれたいが、残念ながら昭和四



白木屋、東急百貨店の歴史を引き継いで、オフィスと商業施設の複合ビル「日本橋一丁目ビルディング」が誕生した。商業施設の名称は「COREDO(コレド日本橋)」という。「COREDO」とは、英語で「核」を意味する「CORE」と「江戸(EDO)」をつなげた造語で、「商業の地である日本橋が東京の核となる」との思いが込められている。施設全体のコンセプトは「時を越えて」。今後は過去から伝わる商業の伝統を活かしつつ、現代的なスタイルを提案していくという。

(平成16年5月26日 富岡畦草撮影)

(文:渡辺邦博)

文 富岡畦草(とみおか けいそ) 大正15年8月三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員



(平成15年10月24日 渡部まなぶ撮影)

十二年(一九六七)に脱落した。思うに、戦後復興期の日本橋は銀座を凌ぐ状況を見せていた。先にあげた老舗の中で、三越本店、白木屋、それに昭和八年(一九三三)に開西から進出した高島屋の三大百貨店が、程よい距離に豪華なビルを構えて全国から客を集めていた。

ところがこれも高度経済成長を遂げた昭和四十年半ばから、地下鉄網が発展し、さらに昭和五十年代、相互乗り入れが進捗すると客の流れに異変が生じ、銀座、有楽町が台頭、日本橋の客は目に見えて減少した。

(昭和三十一年三月十五日撮影)